

「アイシヤリ」

「よおや」と起きたのか」

「そんな、約束が
違います!!」

目を覚ますとそこには
股を大きく開かれ、
まだ幼い蓄を散らされた
アイシヤの姿がありました

「へばつちまった母親の
分は、当然娘に受けて
もらわないとなあ?」

「ぐすっ! いたいっ!」

「お股が壊れちゃうう...
やだああつ...
お母さああんつ!!」

「ああ...アイシヤ...」

「待ってる、今その
未熟マシユに
赤ちゃんのを素入れて
やるからよお」

「やだ、いらぬ、
いらぬからあ!!」

「娘がママになる様をなあ!!」

「じっくり見てろ!!」

「やだやだ...つ!!」

「やあだあああああつ!!」

「お願いします!
それだけは!!」



若い体を持ち上げられ
口と膣内、両方を乱暴に
犯されていくアイシヤは…

やめてっ!
やめてくださいっ!
その子は…まだ幼いんです!!

うるせえ!!

お前がへばらず
しっかり俺たちの
相手をしていれば

娘が犠牲に
ならなかったんだよ

うめき声とも言えない
声を上げながら、
その剛直を受け入れるしか
ありませんでした



ああ…アイシヤ…

お願いします…
もう…もう…やめて…

これで、アイシヤちゃんも
大人の女に
仲間入りできたねえ



アイシヤの体は
激しく痙攣し…

堅く閉じられていた
秘所からは、

入りきらなかった
男たちの子種で
溢れていました…

やめる?
何言ってるやがる

これからだろうが!!
母娘仲良く犯されるっ!!

まだまだ後ろが
控えてるんだよ!!

オラこっちへ来い!

血走った彼らは
一斉に私とアイシヤを
犯し始めました

今度は俺の番だ!!

ガキの方は
俺に犯らせる!

キンタマ
空っぽになるまで
犯してやるぜ!!

マンロもーらこの

誰の子種で孕ませるのか
まるで競うように...





何度も

何度も

ただ、受精の恐怖に
怯えながら

私たち母娘は彼らの
欲望を迎え入れる
しかなかったのです

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ

クッ
クッ
クッ

あれから数か月

私とアイシヤは
およそ数えきれない
ほどの男達の欲望を
その体に受け止め
させられました。

女である私達の子宮は
その欲望を拒絶する
ことはできず

当然のごとく
誰のモノともしれない
種であつという
間に孕まされ…

サ
ア
ア
ア

誰のものとも知れない
子がお腹の中で
育っている…絶望感…

それでも、ここから
抜け出せることを信じて
必死に耐えていました…

でも…

ついに
先日アイシヤの
妊娠が発覚…

最後の希望を摘み取られた
私の精神は…絶望という闇に
飲まれてしまいました。

ゼニス様…

パウロ様…

そしてルーデウス様…

…申し訳ありません…

私たちは…

もう…

ル
ー
デ
ウ
ス

モ
リ
ウ
ス

ヒ

